



寒空中、食料・支援物資などの支給を求める人々の長蛇の列（役場）



自衛隊による給水の様子（役場）



支給された食料を食べながらひと時の家族団らん（避難所：山下中学校）

## 避難所での暮らし

震災発生から、10月に二次避難所が閉鎖されるまでの半年間、多い時で6000人近くの町民が避難所生活を強いられたが、決して快適ではないその生活の中にあっても、絆が生まれ、様々な支援や励ましによって、徐々に笑顔を取り戻していった。



山下第一小学校



浅生原公会堂



八手庭多目的センター



真庭区民会館



合戦原学堂



高瀬多目的センター



坂元中学校



山下中学校





続々と運び込まれる支援物資



役場庁舎入口前に設置された伝言板



避難所での配膳



自衛隊による炊き出しの様子



支援物資として提供されたきしめんを頼る



ボランティアによる炊き出し

町内では多数の家屋が津波や地震で全壊、半壊、一部損壊の被害を受けた。このため、中央公民館、山下第一小学校、山下中学校など19か所に一次避難所が開設され、町外でも柴田町の太陽の村など5か所に二次避難所が設けられた。ピーク時には6000人近くの町民が、各避難所で共同の避難生活を送った。

津波で流され、ずぶ濡れのまま運び込まれた人や、家族とは別々に避難してきた人など、発災直後の避難所は騒然とした雰囲気だったが、自衛隊やボランティア、また被災者相互の助け合いにより、給水や炊き出し、毛布や衣類、薬、支援物資の配布など、徐々に被災者の支援が進んでいった。家族や友人、知人への伝言板なども設置された。

避難所は、居住スペースに限られた集団生活で、決して快適とは言えない環境だったが、厳しい状況の中でも被災者同士が助け合いながら過ごした。大人だけでなく子どもたちも、食事の配膳や物資の配布などに加わり、震災の難局の中にありながらも、新たな絆が生まれていった。

全ての避難所は平成23年10月1日をもって閉鎖され、被災者の生活の場は避難所から応急仮設住宅へと移行していった。





仮設救護所での健診の様子



避難所で配給された食事に笑顔を見せる



仮設風呂「尾張の湯」(山下小学校校庭)



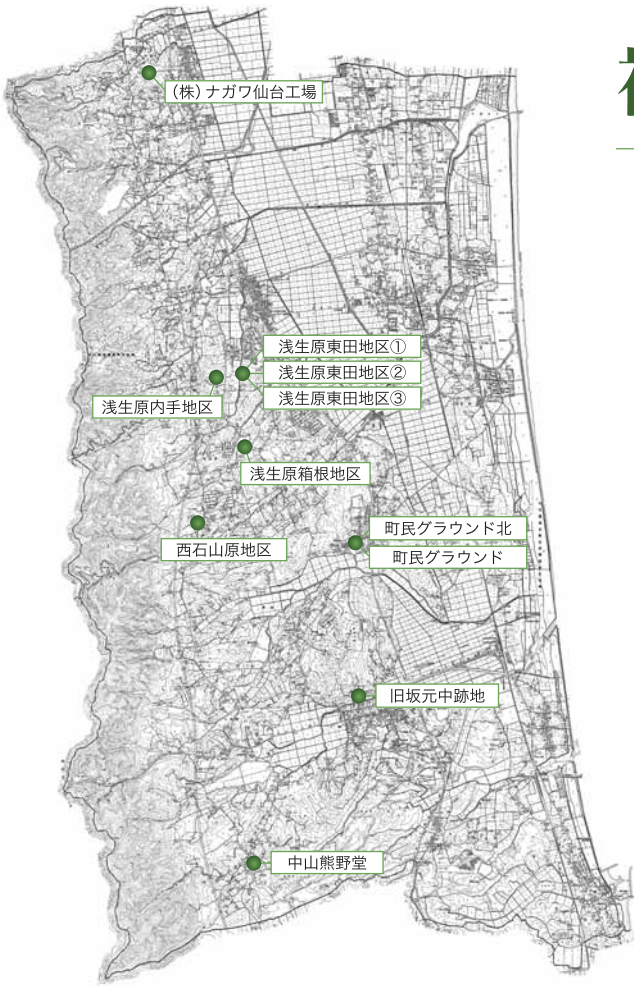
派遣された医療チームが診察を行う様子



風呂上がりに「気持よかった～」とピースサイン



# 被災者の生活状況



## ―仮設住宅での暮らし―

平成23年4月から平成23年8月にかけて急ピッチで建設が進められた応急仮設住宅には、1030戸、2500人近くの町民が生活している。(平成24年12月現在)  
限られた空間の中で少しでも快適な生活が送れるようにと様々な工夫がほどこされ、地域のコミュニケーションを図るための催し等も開催されている。

また、町が独自に建設した「中山熊野堂」と「浅生原東田」の一部の仮設住宅(284戸)では、人数が多い世帯と一緒に暮らせるよう、3K+1DKの仕様となっている。



旧坂元中学校跡地  
(78戸)



町民グラウンド  
(141戸)



町民グラウンド北  
(38戸)







高瀬西石山原地区  
(82戸)



浅生原内手地区  
(106戸)



浅生原箱根地区  
(63戸)



株式会社ナガワ  
仙台工場内  
(130戸)







中山熊野堂  
(125戸)



浅生原東田地区①  
(30戸)



浅生原東田地区②  
(159戸)



浅生原東田地区③  
(78戸)

